

越境する者たち

—ペーター・ビクセル “Kindergeschichten” について—

日野安昭

外国語教室

(1990年9月1日受理)

Wie und warum haben sie die Grenze übertreten?
-Zu Peter Bichsels “Kindergeschichten”

Yasuaki HINO

Seminar der fremden Sprachen

Der Mann, der den Fahrplan auswendig lernt, der Erfinder, der Sachen, die es gibt, noch einmal erfindet und der Mann, der die neue Sprache haben will, die ihm allein gehört. Diese Figuren, die Peter Bichsel in seiner “Kindergeschichten” von 1969 darstellt, könnte man Sonderlinge, Käuze oder Außenseiter nennen. Was sie zu diesen Versuchen drängt, ist aber ihr heißer Wunsch, der unerfüllbar ist. Ihr Interesse liegt ausschließlich in ihrer eingenen Sache und ihre Ideen sind fixiert auf ihren Versuch. Alles andere ist für sie Nebensache. Sie leben in ihrer eigenen Welt, und sie können sich die Welt anders vorstellen, als die jetzt ist. Sie treten über die Schwelle der alltäglichen Welt hinüber, wo die anderen ruhig leben können. Und dadurch müssen sie aber in fürchterlicher Isolation leben. Isolation und Kommunikationsunfähigkeit sind das, was die Hauptfiguren gemeinsam prägt.

In diesen Geschichten geht es vor allem um Sprache und Wissen; Sprache, die nicht nur die Funktion der Information, sondern auch die der Kommunikation hat, die ungewollt und unausweichlich Persönliches enthält, und Wissen, das man allzu leicht und fest “glaubt”.

Indem er diese Figuren darstellt, die mit dem übernommenen Wissen nicht zufrieden sind und das Selbstverständliche in Frage stellen, zeigt Peter Bichsel “das Verhältnis zur Wirklichkeit” (nach Bichsel) der modernen Menschen deutlich und zugleich macht er auch die Grenzen sichtbar, die um uns herum, in unserer Gesellschaft oder in unserem Lebensraum liegen.

ビクセルの短編集 “Kindergeschichten”¹⁾ではきわめて風変わりな人々の滑稽ともいべき様な人生が物語られる。これらの人生をしかし「滑稽」と言って括るには、あまりに苦いものが読後に残されるだろう。なるほどわたしたちの「常識」なるものによりかかってこれらの話を聞くかぎりには、そこに登場する人物たちの滑稽さ、異常さ、愚かしさをあげつらい、笑いのうちにこれらの人たちを「変人」、「奇人」として片づけることができるだろう。しかしこれらの人たちの生き方は、かれらをたんに変人、奇人として片づけるだけではすまない、多くの問題を提示しているといえよう。ここで語られる話は、わたしたちを取り巻く日常の様々な領域にあって、わたしたちがきわめて当たり前とと思っているものに疑義を投げかけるとともに、そこから踏み出して特異な仕方ですれら「当たり前なもの」の領域の境を越えていった人々の話でもあるのだ。いわば「越境する(した)者たち」の話でもある。これら「越境する(した)者たち」の話が語られるなかで、逆にわたしたちは、わたしたちを取

り巻く様々な敷居、様々な境界というものを明瞭に意識させられるだろう。ビクセルはこうした日常の目に見えぬ境界、その境界を生み出す諸々の制度や約束事、境界を境界として固定化し、その境界線を押し広げていくひとの意識、境界に対する人々の関わり方、距離のとり方などを描いてみせるのだ。ビクセルはここで時間、空間、ことば、知識、生産あるいは「もの」といった問題を取り上げ、それらとのわたしたちの関わりのあるありようを、そしてそこから生まれ出るわたしたちの「生活」のありようを逆説的に語ってみせている。わたしたちが「経験」と呼び、あるいは「知識」と呼んでいるものの内実、またそれらとの関わり方の仕方を点検し吟味することを、ビクセルはわたしたちに迫るだろう。これはいわば知の組み替えをも迫るものだ。

この短編集に登場する人物たちは、一般の人々の生活圏とは別のもうひとつの生活圏に属するために、かれらが抱く生活の原理も他の人々とは異なり、当然のことながら「孤独」のなかにある。この「孤独」こそが、なに

よりもかれらの特徴づけるものであり、またかれらにとって不可欠なものでもある。言い換えればこの孤独が、あって初めてかれらの生活も成り立っている、ということができよう。かれらは一般の人々と交わり、その中で生きることはできないのだ。「越境」は必然的に「孤独」を伴うもの、とあってよいだろう。しかし孤独であるがゆえに、孤立しているがゆえに、そこから派生する様々な問題が、かれらを変人にも奇人にもしてしまう。とりわけ「コミュニケーション」の問題はかれらにとって最も重要な問題のひとつに挙げられるだろう。これは「ことば」の問題はもちろんのこと、もっと広く「表現」という問題にも通底するものであり、これらの諸作品の背後にこの表現の問題、表現行為の問題が基調となって響いている。

ビクセルの作品にあっては、主人公たちが抱く強い願望や期待といったものは大抵かなえられることがない。しかしかれらはそうした願望にしがみつき、情熱に転化して、そこに自分の人生を捧げてしまう。かれらは現状（「出発点」）に耐えがたいものを覚え、そこからの脱出を試みるが、そのとき同時にユートピア的なもの、すなわち「願望」や「憧れ」の対象をきっちりと見すえている²⁾。もちろんその「対象」なるものと「現実」との懸隔に、わたしたちは何よりも先におかしさ、滑稽さを見いだしてしまうのだが。しかしその背後に隠された問題を思うとき、戦慄にも似たものを覚え、ビクセルの話の面白さも怖さも味わうことになる。

そうしたビクセルの話のいくつかを取り出して分析し、考察してみようと思う。

「記憶力のよい男」Der Mann mit dem Gedächtnisでは、列車時刻表を暗記してしまった男の話が物語られる。かれは列車の一本一本の発着、行き先、接続、列車番号、運賃など、時刻表に記載されているありとあらゆる情報をそらんじている。かれは一日のすべてを駅で過ごすために、ほかに何もすることができない。酒場に行って酒をのむこともなければ、映画もみないし散歩もしない。ラジオもテレビもなければ、新聞も本も読まない。手紙をもらっても、読むこともしなかったろう。それというの「かれにはそれらに費やす時間がなかった」(S. 62) からだ。

どのようにして時刻表を暗記するのか。その様子をビクセルはこう描いている。「時刻表が改正される5月と10月だけ、この男の姿が二三週間見えなかった。そのときかれは家で机に向かって新しい時刻表を最初のページから最後のページまで暗記し、読んだ。変更のあったところを記憶して、変更のあったことを喜んだ」(S. 62)。かれは新しい時刻表を前において、変更のあった部分に

注意しながらひたすら暗記に努める。それはかれにとって苦痛をもたらすものではない。かれはむしろ変更のあったことを喜びながら、嬉々として暗記に励むのだ。記憶すること、記憶していることがかれにとっては喜びであり、誇りであり、人生のすべてなのだ。かれは時刻表をいわば自分の頭のなかにしまいこみ、封じ込めてしまうように、かれ自身の生活のすべてをそこに注ぎ、封じ込めてしまう。時刻表がかれの人生のすべてなのだ。「時刻表にはなんでも載っている」(S. 66)

列車時刻表に記載されている数字や様々な記号は、多数の現実の列車の運行の様子を紙という平面に記したものにすぎない。それらの数字や記号の背後に、ひとは特定の列車の動きを理解し、想像することができる。この男もまた列車の動きを時刻表から諒解している。それだけならどうということもないのだが、この男の場合、時刻表から抜け出て、歩き出すということがない。このことがこの男の特異な点である。かれは数字と記号、またそれらの意味する世界に留まり、想像の世界に遊んでそこから出ることがない。「かれ自身は一度も列車に乗ったことがなかった」(S. 64)

この男はいわば虚の世界の住人だ。かれは数字のなかに生き、かれの生活は数字に支えられた生活だ。それらが意味し指し示す現実に対して、かれは無関心だ。かれはそうしたものに意味を見い出せないのである。「そんなこと(列車に乗るということ)は無意味なことでもある、とかれは言った、というのはわたしは、列車の到着する時刻をとにかく前もって知っているのだから」(S. 64)。だからかれは列車に乗ることになんの意味も認めない。列車の運行の様子は時刻表によって確認できることであり、かれは列車のひとつひとつの動きをよく知っていて、それを頭のなかで体験しようと思えばいつでもできるのである。わざわざそれを確認するために列車に乗るには及ばない、そうかれは考えているかのようだ。かれの場合、列車があって時刻表があるのではなく、時刻表があるからこそ列車があるのだ。こうした関係の逆転にこそこの男の生の意味がある。

ではなぜ人々は列車に乗るのか。この男によれば「記憶力が悪い」(S. 65)からだという。もの覚えがよければ、かれのように発着時刻を覚えていて、わざわざ列車に乗る必要はない。人々が列車に乗る目的は「時間を体験するため」(S. 64)だ、とこの男は言う。

体験が問題なのだ。かれは時刻表(それも記憶された時刻表だ)という空間のなかで「列車」に乗って、時間に乗る空間を走る。つまりかれは「粗末な記憶力の人々」のように現実に列車に乗ってみなくとも、自由に時を体験することができるのである。これらの人々は列車に乗ることによって初めて列車の移動とともに時間の経過を

体験することができる、きわめて不自由な人たちが、とかれには思えてくるのである。

ここでは列車は、空間を移動するものとして捉えられているのではない。明らかに「時間」のなかを走るものとして列車はある。なぜなら「ほとんど誰もがいつか戻ってくる」からであり、また「毎朝ここから乗って、毎晩戻ってくる人たちすらいる」(S. 65)のだから、またもとの出発点に戻ってくるなら、かれにとって列車はどうして空間を移動するための乗り物とは言えないのである(その間何も「起ころ」なかったのだ)。その間に動いているものは「時間」だ、そうかれは言うのだから。時間はすべて時刻表のなかに収められ、捉えられているのだから、時刻表を記憶してしまえば、時間を捉え、支配し、自在に時間のなかを遊泳することがかなうはずだ。粗末な記憶力しか持たない人々だけが、だから列車に乗るのだ、そうかれは考える。「列車」は自らの肉体を乗せて空間を移動させるための手段だとは、かれには考えられない。空間は時間によってはかられ、距離は時間の経過によって示されるべきものなのだろう。(しかし列車はいわば時間の経過とともに空間を移動するものである。したがって列車という乗り物は、空間と時間のなかを同時に潜り抜けるものなのだ。この男のように走り抜けてきた距離=空間を時間に置き換えられるものではない)。しかしよくよく考えてみれば、「時刻表」とはそうしたものかも知れない。そこに記載されているものは「列車」ではなく、列車に関わる「時刻」なのだから。かれは時刻表を用いて時を移動するのである。その際の移動の乗り物こそが、かれにとっては「列車」ではなく、「時刻表」にはかならない。

時刻表を、このように「時」を詰め込んだものとして捉えたところに、この男の特異さがあるといってもよいだろう。ひとは数字の背後に現実の列車の姿を思い浮かべ、意識を数字の表す時間から列車に滑らせて、時間の経緯から地理的移動を想い、時を空間と繋げたり、時を空間へと転換させてしまうのが通例だろう。つまり時刻表との「関わり方」がこの男の場合、独特なのだといえる。この特異な関わりを「子供じみたもの」として一蹴するわけにはいきまい。大袈裟に言えばここには世界との、あるいは外界との関わり方の仕方、関係の結び方が示されているからである。時刻表をどのように捉え、どのような関係をそこにきり結んでいくか、そこに人の生のあり様も定まるとすれば、この「関わり方」こそが問題なのであり、大事なのだ。

しかしかれは自らの生を時刻表のなかにいわば押し込めてしまったとも言えよう。かれはその優れた記憶力をもって、時刻表をすべて記憶のなかにしまいこみ、一見自在にそれらを操っているように見えるが、むしろそれ

らの数字や時間が逆にかれ自身の生活を律してしまってさえるのだから、かれはそれら数字や時刻にすっかり絡め取られてしまっていることにもなる。

この話で問題になるひとつは、数字(ここでは具体的には時刻を表している)そのものとその数字が指し示しているものとの乖離であろう。この男の場合数字は純粋に時刻を表す指標として存在するものであって、それ以上でもそれ以下でもない。それらは知識として「抽象」の世界のなかに生き続けるものであって、現実との関わりや実際の体験を欠いているのである。それは言ってみれば時刻表という「書物」のなかに閉じ込められた世界であり、「書斎の世界」なのだ(かれは「家で、机に向かって」時刻表を暗記している)。かれが記憶したものは、いわば知識の集積のようなものである(ただしその知識は、かれにあっては現実との具体的な関わりを持たずにいる)。この知の世界は、他ならぬ既知の世界であり、体系づけられ、秩序づけられた世界でもある。かれはこの知の世界の住人として、時刻を表す「数字」の世界に生き遊ぶのである。

しかしこの男のこうしたあり方を滑稽なこととして一笑にふすことはできまい。というのも、他の一般の人々も列車を利用することによってこの男の場合とは逆の意味で時刻表に絡め取られてしまっているからだ。人々は定められた時間によってその時間に自分を添わせ、のせていかなければならない。時間が人々を動かすのだ。発車、乗り換え、接続、到着、まさにひとつのルールにのせられ、運ばれる生である。そこからハミ出るとは難しい。列車の現実の運行を写し取ったものが「時刻表」であるとするなら、その秩序の枠の中を動いているのが一般の人々なのだから、こうした人々の生もまた大きな枠組みの中に閉じ込められ、適応を強いられた生(時刻表に取り込まれた生)と呼ぶべき性質のものだろう。

この優れた記憶力を持つ男は、時刻表の外の世界との接触を持たずにいるように、現実の人々とのあいだの接点を持たずにいる、あるいは人々との関わり方について具体的な回路(方法)を持ち合わせていない。かれには現実との接点、人々の現実の生の営み、いいかえれば人の世の動きの外側に立っていることは、先に述べたこの男の生活の様から容易に推し量ることができよう。新聞も本もラジオもテレビも手紙も無縁、散歩もしなければ映画も見ない、このような生活のなかで、この男は人々と接する仕方すら知らずにいるのだ。かれは一方的な接し方しか知らない。誰かに発車時刻を尋ねられれば、喜色満面、かれは自分が持ち合わせている知識のすべてを質問者に示そうとしてはなさない(S. 63)。この男は「人々はそんなことには興味がない、ということがどう

しても分からない」(S. 63)のだ。やがてかれはそうした人々を口汚く罵るようになる(S. 65)。罵るということではか他の人とのコミュニケーションを持ってないのである。

この男の場合は「一方的に」列車に関する知識を開陳してみせることも、人々を「罵る」ことも、ともにかれなりのコミュニケーションを求める信号のようなものだろう。かれはコミュニケーションにはいるための糸口を知らずに、こうした形でしか他の者との接触を持つことができないのだ。かれに時刻を尋ねるものは、純粹に「情報」を求めている。しかしかれが答える数字や時刻にはたんなる情報以上のものがこめられている。尋ねた人との間にかれは情報の伝達を超えて、会話を、コミュニケーションを求めているのだ。後にみるあの酔っ払いの「アイスホッケー」と同じように³⁾、時刻や鉄道にかれの知識や話はこの男の抱える私的な、そしてきわめて重大な問題と緊密に結びついているのだ。列車に関する事柄はかれのただひとつの関心事であり、かれの全生活がそこに集約されていることからして、かれがうちに抱える問題もまたこの回路を通るよりほか、外に通じる通路がないことを意味してはいないだろうか。しかし人々にとってこの男が発する言葉は情報以外の何ものでもないし、またそれ以外のものを期待してもいないが、かれがその孤独な生活のなかから時刻表を媒介にして周囲に発する信号(言葉)は、実はコミュニケーションを求めるかれの切実な叫びにはかならないだろう。しかしその唯一の軌道が、残念ながら他の人々のところまで延びていないのだ。そのことをかれもそしてまた周囲も理解していない。かれの孤独もこの二重の無理解からいっそう強められていかざるをえないだろう。

コミュニケーションの問題は、他の場面でも描かれている。たとえば鉄道案内所 Auskunftsbüro(何年も後に駅に開設された)に出かけて係官に様々なこみいった質問を浴びせるが、これもまたこの男のコミュニケーションのとり方を示していよう。なるほどその係官が列車に関するあらゆる質問に答えるということが「どうしても信じられない」ので、「その係官を試すために」そうした行動に出た(S. 67)にせよ、やはり普通なことではないだろう。

この男のこうした外界との接し方は、かれの生き方の基本的な姿勢を表している。かれは数字(時刻)の領域、数字(時刻)の世界に生きて無限にこれらの数字をいわば消費するのだが、かれが「体験する時間」はどこまでも疑似的なものにすぎない。この男はどこまでいっても決して本物の体験に至ることはない。こうした本物の体験をもたないかれには、ついに外界に通じる通路がひらかれることがない。駅に立ち、駅に留まり、一日を終え

る。出発点が同時に目的地であり、そこから出ることがない、これもまたこの男の生そのものを写し出している。

しかし鉄道案内所の開設はこの記憶力のよい男に一大転機をもたらした。かれは「時刻表を記憶している」ことの意味を失ったことを悟らざるにはいられなかったからだ。そのため時刻表を焼き捨て、知っていたすべてを忘れる(S. 68)。

これは明らかに一大反転であり、コペルニクス的展開とも言うべきものだ。すなわちかれはだれも「知らないこと」、つまり「この世のいかなる本にも載っていない数字」(S. 69)を知り、記憶しようとしている。ここで初めてかれは「未知の部分」、かれ自身の「意識の外にあったもの」に目をむけるようになった。既知の世界である時刻表の世界、それは誰もが同じ答えを引き出すことのできる世界、もっといえば同じ答えしか得られない世界、すでに答えの与えられている世界、確固としたものに見えるものの、その実どこまで行っても決して本物の体験に導くことのない、底のない不安定な世界でもある。そこから脱け出して、数字と現実とが一致する、つまり本物の体験を可能にする場所へと入っていくのである。そこは知識が知識として独立した枠組みを作っている完結した領域ではなく、数字がそれ自体充足した意味を持ちうる、知識と体験とが確かに対になって結合して存在する「実」の領域なのだ。この男はいわば「時刻表の世界」から越境して未知の世界に乗り出していったのである。それを可能にしたのが「意識の外にあった場所」をかれ自身が発見したということだった。どこまでおすすめていっても決して境界の見えるはずのない時刻表の領野にかれはついに境界を見いだしてしまった。未知なる領域の発見が、つまるところかれに境界を生み出す力を与えたと言ってもよいだろう。なぜなら境界はそれを生み出す力を持ったもののみ見えてくるものなのだから。

この男はまず駅の階段の段数を知ることを手始めに、町中の階段の段数を記憶してしまう。それは隣町にまでおよび、ついには世界中の階段の段数を数えようと思うまでになる。そこで生涯において初めて「よその町に行くために」(S. 69)列車に乗った。階段の段数を「数えて」その数を記憶する。ここでは知識と体験とが結び合い繋がっている。そのためひとつひとつの数字はたんに与えられたものとして目の前にあるのではなく、かれ自身がまず階段を見つけ、その段数を数え、しかるのちに記憶するという一連の作業を行って獲得したものにほかならない。かれが求めるものは「誰も知らないもの」、誰かが「本を操って調べることのできるもの」(S. 69)ではない。この男はまえて与えられている知、すなわち「答えの世界」から訣別したのだ。時刻表の焼却はそこに詰められた「すでに問わずして与えられている答え

の世界」からの別れを象徴的に物語るものである。かれはいま、ピクセルの言うところの「問いの世界」⁴⁾へ入っていくことを決意したのである。

こうした男の変化を、その行為と対象とから、かえってかれ自身の世界を狭め小さなものにしてしまっているだけだ、として嘲笑し非難することも可能だ。しかしここではその「知る」ということ、「知っている」ということの意味、その知識と対象との関わり、知がそれ自体として肥大化し、独り歩きして、わたしたちとの直接的な関わりを離れて存在し、その一方でわたしたちを捉え、抜き差しならぬ影響を及ぼしながらわたしたちの生活や存在をも左右する、そうした知のありようをむしろピクセルは問題にするのだ。足が地につかない「生」の在り方こそピクセルが衝くところだろう。

ところでここに現われる「時刻表」を、たとえば「情報」あるいは「知識」という言葉に置き換えてみたとき、この話はわたしたちにとって俄かに身近な話となってくるだろう。いわゆる情報とひととの関わり方の有様をみれば、すでにある「情報」、すでに与えられている「情報」をわたしたちはこの男と同じように受け止め、受入れ、より多くの事柄を「知る」あるいは「知っている」ということに絶対的な価値とまではいかなくとも、多大の価値をおいてはいないか。現実列車が時間と空間を走る、それを数値や記号に転化して「時刻表」のなかに収めたとき、なるほどその便利さ、有用さを認める一方で、対象あるいは現実との関わりを薄められ、ときに失ってしまってもするのだ。そのときわたしたちは大事な「なにか」を喪うのだ。ものごと＝対象との直接的な接触を失い、いわば「回路」を通してしか、つまりは間接的にしか「対象」に迫ることができない。そこで得られるものはつねに「近似値のもの」でしかないだろう。(「アメリカなんてありゃしない」のあの人々にとっての「アメリカ」を想起すれば十分だろう⁵⁾)。わたしたちの生とはそうした近似的なもの、疑似的なもの、いわば「間接性」のなかに閉ざされて、囲い込まれてすらいるのかもしれない。そこではものごとを「直接に」体験する機会を奪われたり、直接体験することの意味を過小に評価されたり、評価したりするだろう。この優れた記憶力を持つ男はこうしたものごとになりたいという間接的にしかかなわぬ接触を、「知っている」ということによって偽装し、その偽装にすら気づかぬまま、その知るということのなかに取り込まれ埋没してしまったのだ。もちろん「記憶する」ということと「知る」ということは同義ではない。しかしこの男にとってこの両者は同義ないしはそれに近い意味合いを持つものだ。

また「ものを記憶する」ということの意味をこの男に

そって考えてみよう。この男は「時刻表」を記憶する。かれにとって「記憶する」ということは、必ずしも誰もがができることではないという一点にこそその意義がかかっているのだ。だから案内所が容易に様々な問いに答えられるということを知ったとき、「時刻表を記憶すること」はもはやなんの意味も持ちえなくなった。つまり「特殊」なるものがたいそう「一般的」なものに転化してしまったのである。この男にそくしていえば「私的なもの」が「公的なもの」に明らかに侵食され取り込まれてしまったのである。ここに一種の平準化を見ることができよう。この事態はかれにとって、かれの生活自体が同時に均され取り込まれることを意味し、とうてい容認しがたいことだ。

また「記憶」はすでにある情報をまるごと取り込むことであり、「考え、批評する」能力というものを少しも要求しない。というよりも封じ込むと言ってもよいかもしれない。(もちろん何を記憶するかということにあたっては、そこに「選択」という批評的能力・機能が介在することはいうまでもないが、ここではすでに時刻表の記憶ということがあらかじめ与えられているのだからそのこと自体を問題にする必要はあるまい)。記憶は、情報の無批判、無条件の受け容れを意味している。かれは記憶するにあたって、例えばどのような意図、どのような事情で時刻の変更があったか、ということに思いをいたすことはない。加えてここで空間と時間というきわめて抽象的な、具体的把握の困難な対象が問題なのだ。こうしたかれの姿勢に注視しなければ、その後にかれが一大転換し、自らの手で情報の収集に乗り出していく「変化」の意味、つまり情報の内容、質が問題になってくることが分からないだろう。

ピクセルのこの短編集「Kindergeschichten」では他の人との通常のコミュニケーションの回路をもてない、あるいはそれを失った男たちの話が物語られている。これらの男たちは当然孤独や孤立を強いられている。そうしたかれらの孤独や孤立はかれらを取り巻く制約や境界を踏み越えさせてもいく。かれらのなかにはすでにたいそう特異な関係を現実との間に切り結んでいるものもいるが、こうした越境によってかれらは新たに生き生きとした現実との関係を結ぶ。

ピクセルはあるエッセイ⁶⁾の冒頭でひとりの酔っ払いとの出会いを語っている。酒場でひとりの酔客が「わたし」に近寄ってきてしきりに話しかける。この男は、初めアイスホッケー・チームの話をしてしたが、次第に話のなかに男の個人的な事柄をまじえ始める。それらをつなぎ合わせてみると、事情はおよそこういうことらしい。つまりこの男は3日前にもらった給料をすっかり飲んで

しまった。その日家に帰ることになっていたが帰るに帰れない。結局「わたし」は、この男はだれか話相手を求めているのだということに気づく。

このエピソードからビクセルはテーマ（話題）と話者の真意とに関連して次のように語っている。「言っていること（アイスホッケー）と言うべきこと（ジレンマ）とはここではしたがって多かれ少なかれたまたま結びあったにすぎない。この酔っ払いのお喋りにはほとんど情報価値がない。お喋りの目的は情報にあるのではなく、コミュニケーションにあるのだ⁹⁾。つまりこの男にとって「アイスホッケー」はお喋りの相手をつかまえるための「口実」にすぎない。本当のところは別にある。この男はとにかく声をあげずにはいられなかったのだ。それによって事態が好転するわけでもないし、消えてしまった給料が戻ってくるわけでもない。ただとにかく自分の胸のうちの声をあげることによって風通しのよいものにしただけなのだ。声をあげるにしても、犬や猫と違って、ひとは言葉によらなければならない。この男の場合はたまたま「アイスホッケー」という話題と「言葉」が重なり合ったにすぎない、とビクセルは言う。人間は音声を発するとき「言葉（語）」を必要とする。言葉はそのとき副次的なものにすぎない。天気に関するおしゃべりのように、「会話は情報価値を持たない。それは純粋なコミュニケーションである」⁹⁾。

ビクセルは、言葉はたんなる情報伝達のための道具ではなく、人と人とを結び合わせるものとしての機能を持つ、コミュニケーションのための道具としてその働きを重視する。その際、言葉には個人的な事柄がまぬがれがたく含まれることをビクセルは指適する。とりわけ人と人とがお喋りをおぼろしくするとき、むしろテーマ（話題）は副次的な意味しか持ちえない。そこではコミュニケーションが問題なのであって、なんらかの未知の情報を相手に伝達することが主たる目的ではないからだ。コミュニケーションを求めるものは、言葉に託して様々な思いを相手に伝えようとするだろう。そのときのテーマは天気の話かもしれないし、ときには専門的な話かもしれない。いずれにしてもそれらの話題にのせてプライベートな問題を話し手は伝えているのだ。ビクセルは、言葉をたんに情報を伝えるためだけのものとせず、つまり言葉にその意味内容だけを担わせるのではなく、言葉のもつ現実との関わり、言葉が生み出す現実をこそ問題にしたい、と言うのだ。わたしたちは我が身が抱える様々な問題を種々のテーマと結び付けて言葉にして表出しているのだから、この酔客のように、話題の裏側には話者がきわめて私的なメッセージを忍ばせていることも考慮しなければならぬだろう。

たとえば「アメリカなんてありゃしない」Amerika gibt es nicht ではコミュニケーションを求めるものとして王様をあげることができよう。王様は道化たちを置くが、これらの道化たちの働きとコロンビンの働きとを比較するとき、王様がかれらに期待していたものが何であったかを、わたしたちは知ることができるだろう。

昨日と今日との間になんの差異もない、同じことの繰り返される毎日に王様は退屈を抱えている。変化がないというばかりではない。過去も現在も未来も定められた軌道の上を逸脱することなしに繰り返して反復されるのだ。王様は退屈とともに孤独をかかっているに違いない。明日はどのように一日が展開していくのか、王様にも誰にも予測がつかぬような日々とは、そこに個人の感情のいる余地はきわめて少ないだろう。王様は自分の周囲にプライベートな部分を交感しうるあるいは共有しうるものを持ちえないでいる。わずかに三人の道化のみがその可能性を持っているのだ。王様はそうしたものを道化たちに期待しているのだろう。道化たちは王様を「笑わせる」という感情的な部分、言い換えればきわめて私的な部分で関わり合うはずなのだ。しかしかれら三人の道化たちはやがて確実に訪れる死を見据えて恐怖し、結局はその恐怖の感情しか王様に伝えることができない。かれらは決して主従の関係を越えて行動に出ることがない。かれらは王様にたいして一方通行的な関わり方しか持てなかった。そのうえ、最初の「言葉遊び」の道化も、二番目の「ハチミツぬり」の道化べべも、そしてまた三番目の「醜悪な笑い」の持ち主ヘンスヒェンも、ともにかれらの芸が「同じ動作の反復」によるもので、「同じものの繰り返し」という日常の原理や制度を越えるものではない。かれらの言動や行いはなるほど既成の秩序や関係を逸脱し、混乱をもたらす（一時的なものにすぎないが）ものであっても、そこにかれらの「私的な」側面をのせて王様に届けるには、かれらの芸はたいそう不十分で不適切な形式だったともいえるだろう。王様は道化たちの動作や言動に既存の主従関係しか結局見ることができなかったのだ。それはこれら三人の道化たちの芸がいわば犬のなきごえのようなものにすぎないからでもある。かれらは自分たちのあらゆる感情をたったひとつの芸、すなわち通常の言語表現とはほど遠いところにある行為あるいは表現形式に依拠して表現し伝えなければならないのだ。「言葉遊び」は言葉の並び替えによって意味が無意味化され、言葉がたんなる音の組み合わせにしかならなくなり、「ハチミツぬり」はまったく言葉によらない、ことばを必要としないものであり、「笑い声」は言語以前の音声にしかすぎない。かれらの芸はともに「言葉」に基づかないところに成り立っているのである。かれらは自分たちの「私的」なものを伝えるべき術を持ち

えないのだ。言葉遊びもハチミツぬりもまたヘンスヒェンのゾットする笑いも、これらの芸のどれもが「死の恐怖」というたったひとつのメッセージしか王様に届けることができなかった。しかしコロンビンは、こうした道化たちとは決定的に違っている。コロンビンは通常の言語表現によって王様に向き合うのだ。「言葉」をとおして王様と関係を結ぶのである。コロンビンは言葉によって現実あるいは現実の諸関係を変換し、新たに別の現実を生み出す。こうしたことをコロンビンは「子ども」という立場から、すでにある社会の枠組みから外れたところで行うのだ(また外れているからこそできるのだ)。コロンビンはいわば「肉声」で、すなわち社会が着せる衣服を何ひとつまとうことなく、ひとりの人間として私的な部分だけをもって自らの全体となし(「ぼくはなにものにもなるつもりはない。ぼくはすでになにものかです。ぼくはコロンビンです。」(S. 44)), 自分が感じ、思うところを表現する。それは新鮮で力強いメッセージとして王様の胸の裡に届けられ受け止められる。言葉は情報のみを伝達するものとしてある特定の方向性を持ちうるものだったが、コロンビンはそうした方向性を無視し、そこから逸脱して言葉のもつ機能として情報以外のものがあることを、王様に悟らせるのだ。ここでは言葉は人と人との間に会話を成立させるものとして働き、コロンビンの思いが直接送り届けられる。こうした働きは三人の「道化たち」の芸には期待できないところだ。王様はコロンビンとの間にだったらコミュニケーションの成り立つことを理解する。それは王様もまた王様という立場を越えてかれの私的な部分で人と向き合おうとする姿勢を持っていたことを意味している。

あるいはまた「テーブルはテーブル」Ein Tisch ist ein Tischの老人は周囲との通常のコミュニケーションに不足を覚えたといえよう。言葉が現実との対応関係を失い揺らぎ始めたのである。この作品では「言葉」がその中心のテーマとして取り上げられている。老人は語相互の結びつきや言葉の関連性を断ちきり、言葉の秩序を組み替える。かれはこの言葉遊びによって現実世界の秩序を組み替え、別の新たな世界を築こうとする。もちろんここでは言葉は通常の約束事に従うのではなく、老人が生み出す約束事に従って言語体系を作り上げていくのだ。ここに生みだされた言語の体系は共同体に流通している言語の体系とは異なるゆえに、その新たに生みだされた言語をもちいて他の人々との意志疎通をはかることはかなわない。つまりこの老人の言葉は意味伝達の道具としては役に立たない。

それでは意味を伝達しない言語を創造してこの老人は何を目指しているのか。それを考える場合にまず次の二点を考慮しなければならないだろう。ひとつは言葉は、

子供時代の衣服のように、すでに与えられたものとしてある、あるいはあったということ。もうひとつは老人の孤独な生活が示しているように、言葉は決して人と人とを結び付けるものとして、つまりコミュニケーションの具として機能していないということ。すなわち孤独から人を救うだけの力を言葉は持っていないということ。この二点を巡って老人の言葉遊びが始まったといえよう。言葉はこの老人の人生を変える力を持ちえなかった。新鮮な経験をもたらす力を持たなかった。孤独や倦怠からかれを解放する力を持ちえなかった。言葉はむしろ、子供時代のお仕着せの服のように、あるいはまた「ベットはベットであって、絵ではない」ように、人生を規制するもの、制約するもの、固定するものとして働いていたのだ。かれはそうした固定された経験の様式から、固定された場から自らを解放したいと望み、それを企てる。かれは何か新しいものを、真に経験と呼ぶに値するものを求める。そのときかれが眼前に見たものは見知らぬ自分、かれ自身の語りかけに応えるもうひとりの自分だったのであるまいか。それこそかれがその喪失を嘆き、求めていたものであろう。すなわち奪われ失われた自分だったろう。言葉は意味を伝え、情報を伝えるかぎりにおいて機能しても、そこにその言葉を用いる人の私的な思いを乗せて運ぶだけの力とエネルギーをもっていなかった。言葉はきつと乾いた働きしか持たなかったのだ。人と人とを結びつけ、孤独から救い、経験に充ちた日々をもたらす力を言葉は持っていないかった。老人はそうした力を持った言葉を期待し望みまた創造しようとするのだ。

老人は越境した。固定された経験の枠を見、その領域を乗り越えてしまう。そこにひろがるのは未知の世界。かれ自身が自己との関連のもとに現実との言葉の関連を創造していかなければならない世界だ。

世間と隔絶してきたために、人と交わる際のルールをすら忘れてしまった男が「発明家」Der Erfinderと題する作品に登場する。「この発明家はもう長いこと人と話をしたことがなかったので、会話をどう始めたらいいのかもう分からなかった。かれは口火を切る言葉として『あのう、いま何時でしょうか』とか、あるいは『きょうはまたあいにくの天気ですな』とか言うものだということを知らなかった」(S. 56)。かれは他人とコミュニケーションするための方法すら知らない。そのため他の人との間に会話を生み出すことができない。言葉を知っていても、その言葉はコミュニケーションとしての機能を果たせないのだ。かれはいきなり「ねえ、わたしは発明したんだよ」(S. 57)という言葉でもって人々に語りかける。このかれの言葉は情報を伝えるものとしてしか受け取られず、この言葉にのせたかれの私的な「思い」が相手に伝

わり理解してもらえないことはない。かれが語る言葉は「会話」を形作る力も回路も持たない。

ところでこの短編では「物とひと」との関わりの様が描かれている。ここに登場する「発明家」はあの「記憶力のよい男」と同じように、ひとつの事(ここでは発明)にとらわれている。

エジソンが亡くなった1931年以後、「もはや発明家のいない時代」(S. 52)に、ここで描かれる男は発明家として生きる、あるいは生きようとする。「発明家とはひとが決して学んでなることのできる職業ではない」(S. 51)。つまり発明家とはかつてこの世に存在しなかったものを生み出す独創的な才能を持った人のことだ。

かれは「とても重要なかつ独創的な偉大な発明」(S. 57)をする。「はるか遠くで起こっていることを見ることのできる機械」(S. 58)、つまりテレビを発明した。しかしそのときすでにテレビは存在していた。

不幸にも、かれが能力の限りを尽くして生み出したものはすでにこの世に送り出されていて、「発明」が「発明」として認められることがないばかりか、かれの能力も正当に評価される機会すら与えられないのだ。かれの「発明」は常に後手に回る。しかしかれが並外れた能力の持ち主であることは間違いない。なぜならこの男は、目にしたものを独力でもって再び生み出す能力を持っていたからだ。「かれは町で目にしたありとあらゆるものを、もう一度発明した(つくった)」(S. 60)。かれはいわば遅れてきた「発明家」とも呼べよう。ビクセルは最後にこう記している。「でもやっぱりかれは死ぬまで真正正銘の発明家だった。なぜならすでにあるものでも、それを発明するということは難しいことだ。そしてそれができるのは発明家だけだ」(S. 60)。

この「発明家」は自ら生み出していくという点で、「もの」に対しそこに至る直接的な回路を持っている。そしてその回路を維持し、その回路を通じて「もの」に、「ものの本体」に迫ろうとする。たとえこの男のテレビのように、すでに存在するものであっても、その存在を知らずに新しいものを生み出すために費やす才能、能力、エネルギー、時間等を考えあわせてみれば、やはり尋常ではない。またたとえ目にしたものであっても、それをもう一度「発明する」ということは、その「もの」に至る必要な知識や創造力を持ち合わせていなければならない。それはやはり驚くべきことだ。これはほとんどの人が持ち合わせぬ能力である。「なにひとつ発明することのないたいのいの人々」はそうした「ものに至る回路」を持たず(あるいは断たれていると言ってもよいかもしれない)、「ものの本体」に迫る術を持たない。これは現代の人々の「知のありか」、「もの」との関係を示すものだ。

もはや一個の偉大な才能がかつて存在しなかったものを生み出すという時代ではなく、その偉大な才能がたちどころにあらゆるものを理解できるという時代でもない。人々は様々な「もの」に取り囲まれていながら、それらを理解する能力も持ち合わせなければ、そこに至るトータルな知識をも与えられていないのだ。しかしこの発明家はあくまでも自ら目にしたものを再度「発明」していることから分かるように、「もの」に対し独自の姿勢を貫いている。かれはその「再現する」能力を発揮し、確認して自己満足しているわけではあるまい。かれにとっては「もの」に接するとは、そのように自ら再現し、確認するということによって、「もの」そのものの持つ本体(=本質)に迫り、それを「理解」せずにはいられないのだ。再現していくプロセスのなかでその「もの」が持つ原理も性質もその「もの」の存在の意味も、そして何よりもそれらが造られていくであろう工程も、その他その「もの」にまつわる種々諸々の事柄を知り、理解していこうとする。それを模倣とか単なる才能の浪費にすぎないと言ってはなるまい。それこそかれの世界認識の根本原理なのだ。そしてまたそうした作業は同時にかれの外的世界(いわゆる「現実の社会」あるいはもっといえば「歴史」)が歩んできた道とは別のもうひとつのかれだけの「変化のプロセス」を創造していることにもなる。「もの」を中心としてみれば、「発展」のプロセスをなぞり、そうすることでもうひとつの「歴史」を潜り抜けていくのだ。かれは「発明」という関心の一点に集中することによってくしくも「歴史」を体験し、同時に「創造」を体験するのである。つまりかれはものごとを自ら実際に確認し理解し、トータルに認識しようとする。それこそ「たいのいの人たち」には阻まれた道だ。一般の人々はたとえば「まだそこへ行ったことはないが、それについては本を読んで知っている」、「見たことはないけれど、地球は丸いということを知っている」(「地球は丸い」Die Erde ist rund)というふうに「知っていて」、そのことを同時に「信じている」。「地球は丸い」に登場する「知っているけど、信じない」男のように、実際にその知識を点検しようなどとは思わない。こうした一般の人々の「知識」のあり方の対極にあるのが、この「発明家」の「知識」のあり方でもある。

ここで見てきた人物たちは、世間の一般の人たちとは異なる領域(もうひとつの場所)で生き、憑かれたようにその関心、興味、情熱をひとつ事に集中している。傍から見るとかぎりではいわば社会からドロップ・アウトした脱落者ともみえる「変わり者」ではあるが、かれらをとらえてはなさぬもの、かれらの関心の中心にあるもの、またそれとの関わり方を見れば、これらがひとしくわた

したちのきわめて身近な問題として浮かび上がり、作者ビクセルがこれらの物語を通じて現代に生きる人々の浮遊した滑稽とも言える生活の姿を逆照射していることが分かるだろう。かれらがまた「孤独」のなかに生き、孤立し、他の人々とのコミュニケーションを失う一方で、これを代償として、かれらこそある意味では最も意識的に生き、世界をトータルに捉えようとしているとも言えるかもしれない。逆に言えばそうした代償を払うことなしにこうした「浮遊した生」から逃れるすべはないということかもしれない。一般の人々がきわめて覚束ない「約束事」の世界に生きているなら、かれらはその約束事の根拠をも（知らずして）究めようとするのだ。ひとは次第にあるいはますます「もの」や経験・体験や知識から遠ざけられ、人間として真に「生きている」という実感からも遠ざけられてしまう。そうした実在感・充足感から遠ざけられ、あるいは阻まれ、いわば浮遊する生を強いられていると感じるとき、わたしたちはかれらの生を嗤った後に、まるで底知れぬ深い深みをのぞきこんだかのように慄然としつつ、かれらの「孤独」を、そしてまたかれらの深い哀しみを共感と同情をもって受けいれずにはいられないだろう。

テ キ ス ト

Peter Bichsel : Kindergeschichten. Darmstadt und Neuwied, Hermann Luchterhand Verlag 1973
(文中の数字は本書のページ数を示す)

参 考 文 献

Bänziger, Hans : Peter Bichsel. Weg und Werk. Bern 1984

Bichsel, P. : Geschichten zur falschen Zeit. Darmstadt und Neuwied 1979

Bichsel, P. : Stockwerke. Stuttgart 1974

Förster, Jürgen : Kurzprosa als Spiegel der Wirklichkeit. Bad Honeff 1981

Hoven, Herbert (Hg.) : Peter Bichsel : Auskunft für Leser. Darmstadt und Neuwied 1984

Schafroth, Heinz F. : Peter Bichsel. In : Arnold, Heinz L. (Hg.) : Kritisches Lexikon zur deutschsprachigen Gegenwartsliteratur. (KLG) 5. Nlg. S. 1-8

註

1) ベーター・ビクセルの作品集“Kindergeschichten”に収められた作品のうち「テーブルはテーブル」Ein Tisch ist ein Tischと「アメリカなんてありゃしない」Amerika gibt es nichtの2編について、筆者はすでに分析と考察を試みた。

「ベーター・ビクセルにおけることばの遊びについて—“Kindergeschichten”のひとつの世界」名古屋工業大学学報 第32巻 1980年

「子どものイメージ—ビクセルの“Amerika gibt es nicht”をめぐる」名古屋工業大学学報 第36巻 1984年

2) Vgl. Schafroth : Peter Bichsel. S. 2-3

3) Bichsel : Die Geschichte soll auf dem Papier geschehen. In : Hoven : Auskunft für Leser. S. 49-56

4) Bichsel : Geschichten zur falschen Zeit. S. 31ff.

5) 日野「子どものイメージ」S. 69参照

6) Bichsel : Die Geschichte soll auf dem Papier geschehen. In : Hoven : Auskunft für Leser. S. 49-56

7) Ebd., S. 50

8) Ebd., S. 50